No.22

連携室だより

第22号
2012.10

目　次

●－会員の声－　「急性期病院について」…… 2

●－職場紹介－　「事務部長就任のご挨拶」…… 4

●－新入職員紹介－…… 6

鹿児島市医師会病院

会員の声

急性期病院について

鹿児島市外科医会
会長　末永 豊邦

はじめに

鹿児島市医師会から医療行政への協力として、各種委員会への委員選出も外科医会としては大事な役目と考えています。医師会病院に関連する委員会として、医師会病院運営委員会、医師会病院協力委員会、救急診療体制運営委員会、夜間急病センター委員会に委員を選出しています。

医師会病院は鹿児島市医師会立病院であり、市医師会員の診療所・病院からの資金提供により設立された病院と認識しています。経営の母体は鹿児島市医師会であり、病院管理者は市医師会長となっています。小生は市医師会の役員は全く経験しておりませんので、内情はよく判りませんが、医師会病院運営の実権は市医師会執行部にあり、院長以下現場スタッフの意見・要望がどの程度反映されているのか不明な所が若干気になりました。（医師会病院運営委員６年間の経験より）

医師会病院は会員からの紹介患者、及び救急車搬送患者を主体に診療する施設の為一般外来患者は原則来院されておりません。地域の医療を担っている医師会員からの紹介は断らないのが医師会病院の基本である事は周知されています。

医師会病院は診療のみならず、看護学校併設による看護師養成（最近廃止となったが）、臨床検査センター併設により地域の医療機関の医療機器設備の不足を補ってきています。また、災害発生時には率先して現場に医療スタッフを送り、人命救助活動を行っている事に敬服します。

医師会病院における外科

病院開設当初の目玉として手術症例数が県内随一を達成し、長らくその地位を守り、病院経営においてドル箱の存在であった。長期間の黒字経営による財源の蓄積で、自己資金による病院新築を成就できたことに当時は羨ましく思ったものです。外科スタッフが他の部門との協力を基に日夜・深夜を問わず、精力的・献身的に労力を惜しまず仕事（手術）をされた結果だと思います。

スタッフの充実、臨床研究発表、術中臨床病理医との連携確立、鏡視下手術の導入、臨床研

修医の教育など鹿児島県の先端を走ってきています。最近、外科スタッフの異動を耳にし診療体制に影響があるのではと若干心配しております。また、近年では癌化学療法の外来化学療法を積極的に取り入れ、鹿児島県下の諸施設と協同で、医師・看護師・薬剤師・栄養士・一般職員からなるチーム医療を勉強する会を設立し、回を重ねるごとに盛況となってきています。（宮崎県からの参加もある。）県内癌化学療法のレベルアップに多大なる貢献をしており、癌医療に携わる１人の外科医としても今後の活躍を心から期待します。

厚労省の病床削減方針による影響

全国病床数の大幅削減を医療政策の大きな柱としており、徐々に中規模病院に経営上の影響が出現してきている。

２年に１回の診療報酬改定の度に加算のもらえる施設基準の内容が厳しく規定されてきています。クリニカルパス導入による平均在院日数の短縮効果が出現すると、それに伴って病床稼働が下降し、病院経営を困難にしつつある。理想的には平均在院日数を短縮したまま、病床稼働率を90％以上に維持できれば経営は順調になると思いますが現実的ではありません。医師会病院では開設当初から病床稼働率が95～100％を長期に亘り継続して経営が非常に安定していた。しかし、近年ではクリニカルパス導入後より病床稼働率は徐々に低下し、早期退院が病院内外に周知された為、病床稼働率は75％前後にまで下降しているのではないでしょうか。早期退院させた分の新規入院患者の獲得が困難な為です。東京・大阪・福岡などの大都市に比べ、170万県民、60万鹿児島市民の人口密度では新規入院患者（急性期病院としての）の増加は簡単には見込めない。むしろ九州新幹線による患者の流出が懸念される。

今後の課題

200床～300床前後の急性期病院としての中規模病院（医師会病院のみならず他の鹿児島市内の病院を含めて）の将来は現状のままだと明るくないのでは。届け出病床数の75％位に病床数を減らし、それに見合った職員の削減を行う方向を選択しなければならない時期にきているのでしょうか。急性期病院としての経営困難が表面に出てくると、病院間の合併・吸収の噂が流れてくるが、遠くない未来に現実味を帯びてくるのではと心配している。

最後に、市医師会病院の運営基本として24時間体制で救急車搬送患者、地域医療機関からの救急依頼の紹介患者を断ることなく、治療後は医療連携を活発に行い、地域の医師会員先生方との信頼関係を構築する事が大事ではないでしょうか。

職場紹介

事務部長就任のご挨拶

事務部長　森　俊一

７月１日付けで、事務部長の職を拝命しました。浅学非才の身ではありますが、職責を全うできるよう精一杯努める所存ですので、よろしくご指導賜りますようお願いいたします。

私は、昭和55年４月に鹿児島市医師会に入職しましたが、当時、医師会病院開設に向けて鋭意討議されている頃でありました。横小路・久留会長時代の執行部の先生方が、地域医療を充実させていくには医師会病院はぜひとも必要であるという信念のもと、まさに命をかけて尽力なさったことを、若輩者の身からすれば驚愕の思いで接しさせていただきました。その熱い志しで、当医師会病院は昭和59年６月に、会員の共同利用施設としてオープンいたしました。

その後、会員の先生方のご協力、執行部の先生方のご指導、職員の方々の努力により、順調な歩みを続けてくることができました。

しかしながら、昨今の諸々の医療環境の悪化もあり、経営面で厳しい状況が出てきました。

それが顕著になったのが、昨年９月頃からで、各月の経常利益がマイナス続きとなりました。小児救急医療拠点病院事業の返上、医師不足、看護師不足によるマンパワー不足等により、医療体制（稼動病床削減等）の縮小を余儀なくされたことも一因であろうと推察されます。

近年の入院患者数等の推移を以下に示しますが、ここ数年、減少傾向にあります。これに加え、クリティカルパスにより在院日数も短くなり、在院患者延数・病床利用率の低下がみられてきております。

院内で、経営改善策を打ち出すべく、田畑院長による各所属長との面談や、院内各種会議等で鋭意検討し、改善できるものから順次、実行に移している段階であります。

医師会病院は、会員の共同利用施設として、地域医療支援病院として運営されており、会員の先生方からのご紹介をいただかなければ患者様を増やしていくことはできません。

ただ、せっかくご紹介いただいても、二次救急医療であるがため、急患対応に人手がかかることも多く、ブッキングなどでお断りするケースもあります。これについても医師不足などの影響もありますが、今、院内でこれをでき得る限り少なくする対策を検討中であります。

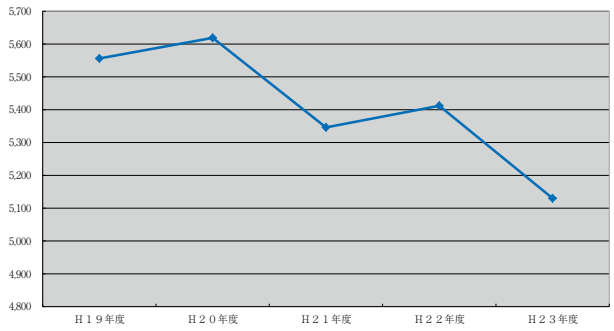
事務部としましても、経営改善策の一助になるべく、診療科別原価計算の精度をあげるなど、各種統計資料の充実をめざしております。

収支上は、高額医療機器の導入などによる減価償却費に圧迫されている状況もありますが、これも共同利用施設として、最新の医療機器を導入しなければならないという使命もあると思います。会員の先生方の一層のご利用をお願いするものであります。

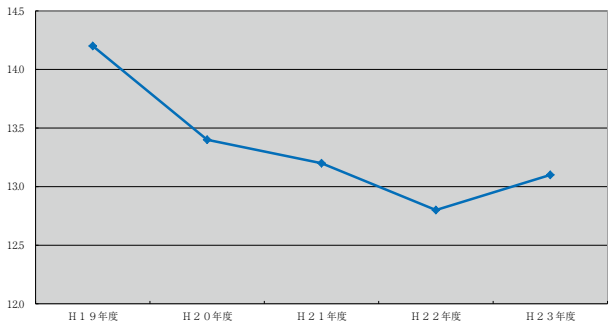
今後とも引き続き、ご指導・ご協力のほど、よろしくお願い申し上げます。

	H 19 年度	H 20 年度	H 21 年度	H 22 年度	H 23 年度
入院患者数（人）	5,556	5,619	5,346	5,412	5,130
在院患者延数（人）	78,467	75,316	70,336	69,347	67,453
平均在院日数（日）	14.2	13.4	13.2	12.8	13.1
病床利用率（%）	84.3	80.9	75.6	74.5	72.3

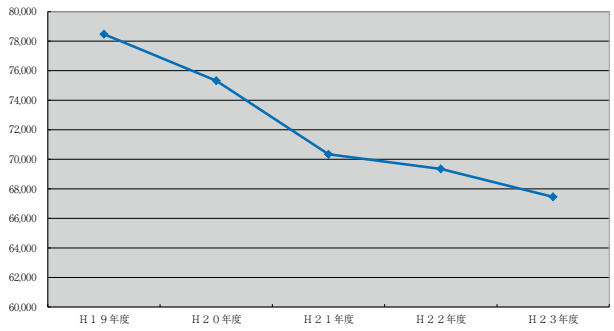
入院患者数



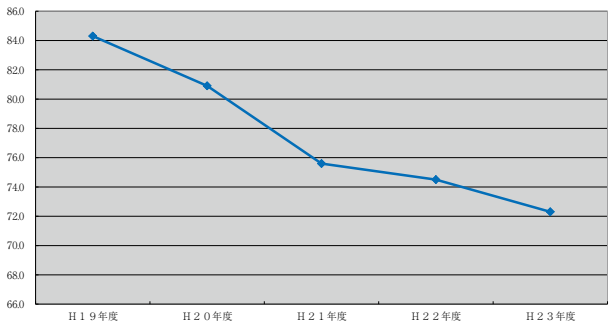
平均在院日数



在院患者延数



病床利用率



新入職員（新任医師）紹介

小児科医師

＜プロフィール＞

（H 24. 7. 1～）

名　　前　平林（ひらばやし）　雅子（まさこ）

出 身 県　鹿児島県

出身大学　鹿児島大学

前勤務先　鹿児島大学病院小児科

平成22年に鹿児島大学病院小児科に入局し、鹿児島こども病院・大学を経て７月より医師会病院で働かせていただいております。ご迷惑をおかけすることもあると思いますが、皆様よろしくお願い申し上げます。

麻酔科医師

＜プロフィール＞

（H 24. 7. 1～）

名　　前　萩原（はぎはら）　信太郎（しんたろう）

出 身 県　鹿児島県

出身大学　鹿児島大学

前勤務先　大学病院

趣　　味　空手
アロマ
紅茶

平成24年に鹿児島大学 ICU に入局し、７月から医師会病院に勤務させて頂くことになりました。若輩者ですが一生懸命努めますので、ご指導ご鞭撻のほど、何卒よろしくお願い申し上げます。

麻酔科医師

＜プロフィール＞

（H 24. 8. 1～）

名　　前　谷口（たにぐち）　淳一郎（じゅんいちろう）

出 身 県　鹿児島県

出身大学　鹿児島大学

前勤務先　鹿児島大学病院

趣　　味　特になし

平成18年に鹿児島大学麻酔科に入局し、大学病院・鹿児島市立病院、鹿児島医療センター勤務を経て、４年ぶり２度目の勤務となりました。色々とご迷惑をおかけすることもあると思いますが、よろしくお願い致します。

【基本理念】

患者様の意思と権利を尊重し、会員や地域の医療ニーズに応え、安全で質の高い誠実な医療を提供します。

【基本方針】

1）医療を通じて地域社会への貢献
2）救急医療の推進
3）専門性を追求した高度医療の実践と連携の強化
4）予防医学と医療人教育

鹿児島市医師会病院　連携室だより　No.22
創刊日：平成17年８月10日
発行月：平成24年10月（年３回発行）
発行者：〒890－0064　鹿児島市鴨池新町７番１号
鹿児島市医師会病院　院長　田畑　峯雄
担　当：医療連携・相談室
ＴＥＬ：099－254－1125（代表）
ＴＥＬ：099－254－1121（医療連携・相談室）
ＦＡＸ：099－254－1308（医療連携・相談室）
ホームページ：http://city.kagoshima.med.or.jp/kasiihp
ご意見などございましたら、お気軽にご連絡ください。